

日本語コミュニケーション教育方法に関する研究

橋本, 恵子

<https://hdl.handle.net/2324/2236343>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (芸術工学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏名	橋本 恵子			
論文名	日本語コミュニケーション教育方法に関する研究			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	板橋 義三
	副査	九州大学	教授	古賀 徹
	副査	九州大学	教授	郭 俊海

論文審査の結果の要旨

従来、日本語によるコミュニケーションというと、どうしても西洋、特にアメリカのコミュニケーション体系を素地として考えられるものであり、それは日本におけるコミュニケーション研究がアメリカのコミュニケーション研究を土台としたものであるからである。それに対して本論文では日本語によるコミュニケーションをアメリカのコミュニケーション方法を取り入れつつも、日本語を十部に活かし、二項対立的な立場でのコミュニケーションではなく、その参加者同士が十分お互いの素材、立場、感情などもすべて含めた状況を共有し、そこからお互いを含みこむ対話的精神を共有したコミュニケーションを具体的に提示することをめざしたものである。

第一章では日本語によるコミュニケーションとは何かについて定義し、その内容について説明し、次いで、日本におけるコミュニケーション論として最も有力でかつ本邦初のコミュニケーション論と認めることができる時枝の言語過程説を概説している。この時枝の言語過程説をコミュニケーション論として捉えたのでは橋本氏が最初であり、その着眼点も優れていると言える。

第二章では日本語力を高める教育方法について議論している。日本語の文構造について時枝の入子型構造を理解させることで、日本語という言語によりたやすく馴染み、理解力や運用能力も向上することを主張した。その論拠として実際に日本人学生だけでなく、韓国大学生や中国人学生との比較も行い、その有効性が見られる傾向が非常に強いことを挙げている。

第三章では、音声コミュニケーションをより良い形で成立させるために、スピーチ構成図というものを考え、主張、その論拠となる理由、反論、結論という流れで論がすすめられるだけでなく、日本人学生にとっては非常に具体的でわかりやすい自分の主張をするためのスピーチ方法を開発した。このスピーチ構成図を使用して実際に自分のスピーチを分析することでより良いスピーチ構成を意識化させることができた。この成果もさることながら、この構成図もデヴィッド・ボームなどの対話の考え方などもさらに導入し、その図を改良し、非常に簡潔で理解しやすいものの開発も行った。

第四章ではディスカッション教育について授業のデザイン開発を行い、それを実践してみると、これまでのディスカッション教育の問題点を探り、さらにそこから日本人特有のディスカッション教育があるのではないかと考え、楽しさ、協調、共感といった相手を包み込む要素取り入れたコラボ・ディスカッションを試行し、問題点も浮上させ、さらなる改善を施した。

第五章では弁論者によるスピーチに対する印象評価を行い、日本人、中国人、韓国人の評価の比較を行い、その異同を探り、その裏にある移動の原因にも言及した。

第六章では大隈重信の演説に対する分析を行うことにより、口頭による表現の特徴を探り、そのスピーチの特徴を活かせないかと分析を行った。その結果、言語学的特徴がいろいろと浮上り、日本語のコミュニケーションの一助となることを見た。

第七章では現代のコミュニケーションのツールとして欠かせないコンピュータ用語の学習の状況も日中韓で比較対照しながら、その異同を分析した。これは一見コミュニケーションに無関係のように思われるが、実際にはこの表記と用語の関係は大きく、この用語の知識の習得とその理解に力を入れることも非常に重要であることを力説した。それを実際に実証するためにコンピュータ用語と日本語による教材開発も行い、成果を得ている。

第八章は終章であり、これまでのまとめとそれぞれの章で示した方法論や教材を開発・実践し、その成果が継続的に出されている。

それぞれの審査員からの本論文に対する評価は非常に高く、橋本氏のこれまでの研究成果と実践の総括と更に発展させた内容というべきものである。本論文は、以上の教育学的観点からの学問に対する寄与は大きく、日本語によるコミュニケーション論を大きく前進させた、貢献度の高い、優れた論文であり、学位（芸術工学）論文に相応しいものであることを確認した。